569-142
1200700597719

第二部 第六十七篇

作曲白秋童謠集

北原白秋著

改造社出版

改造文庫

第二部　第七十六篇

作曲白秋童謠集

北原白秋著

改造社出版

小序

童謠の開花期が來た。

童謠民謠は普く社會に流布し唱歌されることに於てその本質の意義ある問題がある。童謠はまた兒童の自然に歌ふにまかせて、必ずしも作曲家の曲と相俟たずともよい。それ自身のもつ調律がある。けれども幸に理解ある音樂家によつて作曲され、兩々交響して兒童の世界に私たちの藝術を提供する機會を持つ悦びは更に愉快に思へる。

私の童謠もすでに數多く作曲された。さうして學校に、家庭に、音樂會にラヂオの放送にレコードに、可なり普及しつつある。

此の集にはそれらの中でも人によく知られたものをとりまとめて收錄した。ただこれらは作曲された童謠の一部ではあるが全部ではない。つぎつぎにまた新曲が成るであらう。曲についてはそれぞれの曲譜集が既に世に出てゐる。

昭和四年春　白秋

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200700597719

作曲白秋童謡集目次

山田耕作作曲

芥子粒夫人……二
からたちの花……二一
この道……二二
遊ばうよ……二四
ペチカ……二五
待ちぼうけ……二七
かやの木山の……三〇
あわて床屋……三一
かへろかへろと……三三
竹取の翁……三五
曼珠沙華……三八
むかし噺……三九
かぐや姫……四一
雀追ひ……四二
象の子……四四
お月さま……四六
夜なか……四七
ほういほうい……四八

からまつ原……四九
お月夜……五〇
たんぽぽ……五三
さいかち蟲……五四
足踏……五五
新入生……五七
酸模の咲くころ……五九
あの子のお家……六〇
犬のお芝居……六三

弘田龍太郎作曲

子供の村……六七
八百屋さん……七〇
赤い帽子・黒い帽子・青い帽子……七二
お祭……七三
ほうほう螢……七六
鳥の巣……七九
とほせんぼ……八〇
仔馬の道ぐさ……八一
うさうさ兎……八三
ちんころ兵隊……八四
雀の機織り……八六
とんからこ……八八
雀のお宿……九〇
兎の電報……九一
雉子ぐるま……九二
蝶々と仔牛……九四
鳰の浮巣……九四

ぽつぽのお家……九五
かぜひき雀……九六
夕焼とんぼ……九九

成田爲三作曲

山のあなたを……一〇三
眞夜中……一〇四
雪のふる夜……一〇五
葉つぱ……一〇七
雨……一〇九
栗鼠・栗鼠・小栗鼠……一一〇
吹雪の晩……一一二
ちんちん千鳥……一一三
こんこん小山の……一一五
月夜の家……一一六
お人形焼く家……一一八

中山晉平作曲

クックコック……一二三
砂山……一二五
月夜のお囃子……一二七
たあんき、ぽうんき……一二八
みそつちよ……一三〇
雨ふり……一三一
搖籠のうた……一三三
七面鳥さん……一三五
ねんねのお鳩……一三七
みんなして森へ……一三八

本居長世作曲
雀のお手まり……一四一
こもりうた……一四三
町田嘉章作曲
舌切雀……一四七
草川　信作曲
月の夜……一五三
おうた……一五四
離れ小島の……一五六

——了——

山田耕作作曲

芥子粒夫人

1

「綺麗な綺麗なちび鼠、
おまへにお話さしてあぎよ。」
　魔法つかひは呪文をとなへ、
　さあさあお食べよ、米の粒。

魔法つかひとちび鼠、
お話しいしい暮らしてた。
　ガンヂス河の堤の上の、
　　棕梠葉のお小屋のむしろ小屋。

それもしばらくちび鼠、
悲しくなつたで、ちゆうちゆうちゆうちゆう、
「變へて下され、鼠にや飽いた。」
「なにになりたい」「なににでも。」
「猫にしてやろ。」にやんにやんにやん、
猫になります、ちび鼠。
「變へて下され、猫にも飽いた。」
「なにになりたい。」「なににでも。」
「犬にしてやろ。」わんわんわん、
犬になります、三毛猫が。
「變へて下され、犬にも飽いた。」
「なにになりたい。」「なににでも。」

「猿にしてやろ。」きやつきやつきやつ、
猿になります、むく犬が。
「變へて下され、猿にも飽いた。」
「なにになりたい。」「なににでも。」
「猪にしてやろ。」ふうふうふう、
猿が野猪に變ります。
「變へて下され、美しい人に、」
「ああ、ああ、野猪はいやらしい。」
そこで一と振り、魔法杖、
見れば綺麗な娘の子。
眞赤な練絹、ふさふさ黒髪、

金の腕環や髪かざり。

綺麗な綺麗なその娘、
芥子粒夫人と名がついた、
　今度は樂しいお邸ずまひ、
　棕梠の葉お小屋はふり棄てる。

2

王さまお馬で通られる。
花に水かけ、芥子粒夫人
　「紅い果實さしあげまする、
　陛下お入りなさいませ。」
「おお、美しい、ありがたう、」

王さま馬からお下りになる。
　「紅い果實まだまだ食べぬ。
　おまへの親の名訊いてから。」
わたしの親たちちび鼠
とは、云ひにくい、はづかしい、
　「きつと女王になる人と、
　魔法つかひが申します。」
「おまへの名まへは。」「はい、陛下、
芥子粒夫人と申します。」
　「よしよし、おまへと結婚しましよ。」
　魔法つかひも「こりや目出度う。」

3

今は御殿で女王さま、
それでも、おづおづ、芥子粒夫人、
「いまに知れたらどうなるでしよか、
わたしや嘘つき、すぐ知れよ。」

ある日、木かげに腰かけて、
お菓子たべたべ見とれてた、
眞赤な練絹、ふさふさ黒髪、
お池に映つた水鏡。

すずしい銀色、絹ヴエール、
桃いろ、紫、玉かざり、

つくづく見とれて、「まあまあ、御覽、
なんと綺麗な女王さま。」

そこへちよろちよろ、ちび鼠、
お砂糖の一かけいただこか。
「しつしつ、あつち行け、いやらしい鼠。」
足でちよつと蹴る芥子粒夫人。

すると鼠はちゆうちゆうちゆうちゆう、
「おまへわたしを知らないの。」
「いえいえ、知りやせぬ、なんの知らう。」
いやな顏して女王さま。

「おまへは母さんお忘れか、

ほれほれ、お父さんも來てゐるよ。」
　またも鼠がちよろちよろ出て來て、
　「おおおお出世ぢや、これ娘。」

「わたしの婿さま、王さまだ。」
「おれも會ひたい、王さまに。」
　「婿だ、舅姑だ、お喜びなさろ、
　おまへ會はせにや、わしらゆこ。」

「あらまあ、父さん、お母さん。」
元は娘のちび鼠、
　「どうしようどうしよう、もう嘘知れる。」
　ふらふら目まはし、池の中。

鼠の兩親こりやどうぢや、
ちゆうちゆうどうしやう、なぜ死んだ。
　わけもわからず、飛んで行た、馳けた。
　泣き泣きラシさん呼びに行た。

魔法つかひのラシが來りや、
王さま泣き泣きござらしやる。
　「陛下、まづまづまことを云へば、
　芥子粒夫人こそちび鼠。」

「お亡くなられた芥子粒夫人
あきらめあそばせ、仕方ない、
　なにかいいことござりましよ、ござろ、
　今にしあはせ、うめ合せ。」

4

とても不思議な緑の芽、
間も無くお庭に茂ります。
見る見る見事に、魂げるばかりに、
咲いたは咲いたは芥子の花。

芥子粒夫人こそ女王さま、
女王さまこそ芥子の花。
赤の練絹、生絹のヴェール、
桃いろ、紫、真珠いろ。

とても不思議な芥子の花、

誰もはじめて芥子の花。
これが世界の芥子の先祖よ。
印度のお話、芥子粒夫人。

からたちの花

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

からたちのとげはいたいよ。
青い青い針のとげだよ。

からたちは畑の垣根よ。

いつもいつもとほる道だよ。
からたちも秋はみのるよ。
まろいまろい金のたまだよ。
からたちのそばで泣いたよ。
みんなみんなやさしかつたよ。
からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

この道

この道はいつか來た道、
　ああ、さうだよ、
あかしやの花が咲いてる。

あの丘はいつか見た丘、
　ああ、さうだよ、
ほら、白い時計臺だよ。

この道はいつか來た道、
　ああ、さうだよ、
母さんと馬車で行つたよ。

あの雲もいつか見た雲、
　ああ、さうだよ、

山査子の枝も垂れてる。

遊ばうよ

『遊ばうよ、遊ばうよ。』
ほうら、來てゐる、呼んでゐる。
たれかこどものこゑがする。

『遊ばうよ、遊ばうよ。』
ひより、おひより、ひるすぎは
たれか霞から呼びに來る。

お庭の、お庭の、菊のはな

なにかあかるいおひよりは、
なにかさびしいおひよりは。

『遊ばうよ、遊ばうよ。』
いつもたれかゞ呼びにくる、
いつもうらから呼びにくる。

ペチカ

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。お話しましよ。
むかしむかしよ。
燃えろよ、ペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。おもては寒い。
栗や栗やと
呼びます、ペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。ぢき春來ます。
いまに楊も
萠えましよ。ペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。誰だか來ます。
お客さまでしよ、

うれしいペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ、お話しましよ。
火の粉パチパチ、
はねろよ、ペチカ。

待ちぼうけ

待ちぼうけ、待ちぼうけ。
ある日、せつせと、野良かせぎ、
そこへ兎が飛んで出て、
ころり、ころげた

木のねっこ。

待ちぼうけ、待ちぼうけ。
しめた。これから寝て待たうか。
待てば獲ものは驅けて來る。
兎ぶつかれ、
木のねっこ。

待ちぼうけ、待ちぼうけ。
昨日鍬とり、畑仕事、
今日は頬づゑ、日向ぼこ
うまい伐り株、
木のねっこ。

待ちぼうけ、待ちぼうけ。
今日は今日はで待ちぼうけ、
明日は明日はで森のそと、
兎待ち待ち、
木のねっこ。

待ちぼうけ、待ちぼうけ。
もとは涼しい黍畑、
いまは荒野の箒草、
寒い北風、
木のねっこ。

かやの木山の

かやの木山の
かやの實は、
いつかこぼれて、
ひろはれて、

山家のお婆さは
ゐろり端に、
粗朶たき、柴たき、
燈つけ、

かやの實、かやの實、
それ、爆ぜた、
今夜も雨だろ、
もう寢よよ。

お猿が啼くだで、
早よお眠よ。

あわて床屋

春は早うから川邊の葦に、
蟹が店出し、床屋でござる。
　チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

小蟹ぶつぶつ石鹸を溶かし、
親爺自慢で鋏を鳴らす。
　チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

そこへ兎がお客にござる、
どうぞ急いで髪刈つておくれ。
　チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

兎ア氣がせく、蟹ア慌てるし、
早く早くと客ア詰めこむし。
　チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

邪魔なお耳はぴよこぴよこするし、

そこで慌ててチョンと切りおとす。
　チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

兎ア怒るし、蟹ア恥よかくし、
爲方なくなく穴へと逃げる。
　チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

爲方なくなく穴へと逃げる。
　チョッキン、チョッキン、チョッキンナ。

かへろかへろと

かへろかへろと

なに見てかへる。
寺の築地の
影を見い見いかへる。
「かべろが鳴くからかあへろ。」

かへろかへろと
たれだれかへる
お手々ひきひき
ぽつりぽつりかへる。
「かへろが鳴くからかあへろ。」

かへろかへろと
なに爲てかへる。
葱の小坊主

たたきたたきかへる。
「かへろが鳴くからかあへろ。」

かへろかへろと
どこまでかへる。
あかい燈のつく、
三丁さきまでかへる。
「かへろが鳴くからかあへろ。」

竹取の翁

野山かせぎのお爺さま、
合唱（竹取りの翁だ、竹取りの翁だ。）

いつも竹取、笹かつぎ。

合唱（いい翁だ、いい翁だ。）

ある日、ありやりやと驚いた。

合唱（ピカリピカリ光つた、ピカリピカリ光つた。）

竹の根方に豆の人。

合唱（小つちやい姫だ、小つちやい姫だ。）

その子ひろうて、お爺さま、

合唱（ほくほく歸つた、ほくほく歸つた。）

鳴くは鶯、よい日和。

合唱（ホウ、ホケキヨよ。ホウ、ホケキヨよ。）

これよ婆さま眩ゆかろ、

合唱（家まで光るぞ、家まで光るぞ。）

おお、おお、かはいい、お爺さま。

合唱（かぐや姫だ、かぐや姫だ。）

それからしあはせ、篠の藪、

合唱（いつ行つてもだ、いつ行つてもだ。）

竹のふしぶし、金のつぶ。

合唱（ホウ、ホケキヨよ。ホウ、ホケキヨよ。）

むかしむかしのお爺さま、

合唱（竹取りの翁だ、竹取りの翁だ。）

お伽ばなしのかぐや姫。

合唱（それから、きかして、それから、きかして）。

曼珠沙華

ゴンシヤン、ゴンシヤン、何處へゆく。
あかい御墓の曼珠沙華、
曼珠沙華、
けふも手折りに來たわいな。

ゴンシヤン、ゴンシヤン、何本か。
地には七本、血のやうに、
血のやうに、
ちやうどあの子の年の數。

ゴンシヤン、ゴンシヤン、氣をつけな。
ひとつ摘んでも日は眞晝、
日は眞晝、
ひとつあとからまたひらく。

ゴンシヤン、ゴンシヤン、何故泣くろ。
いつまで取つても曼珠沙華、
曼珠沙華、
怖や、赤しや、まだ七つ。

註 ゴンシヤン、お嬢さん。(柳河語)

むかし噺

山へとゆくのはお爺さん、
川へと下るはお婆さん。

山では柴刈る鉈の音、
川では桃呼ぶ小手まねき。

むかしのむかしはなつかしい、
いつでも青空、日和鳥。

ねんねのお里はなつかしい、
いつでも夕燒、藪雀。

山へとゆくのはお爺さん、
川へと下るはお婆さん。

かぐや姫

かぐや姫かよ、うしろさの藪に、
何か光るぞ、みんな早うおいで。

みんな出て見りや、雀が逃げた、
笹に入日が、ちらつくばかり。

かぐや姫かよ、こつちさの藪に、
何か光るぞ、みんな來て御覽。

みんな行つて見りや、雀が逃げた、

露に金の陽がきらつくばかり。
かぐや姫かよ、あつちさの藪に、
何か光るぞ、みんな行つて御覧。

雀追ひ

山椒太夫

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
ここは荒海、佐渡ヶ島
雑太の庄の里はづれ。

安壽こひしや。ほうやれほ。

厨子王こひしや。ほうやれほ。
二人が母さま、ぼろぎもの、
めんめめくらで、竿もつて。

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
追つても追つてもむら雀、
干した蓆の粟のうへ。

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
遠い薄日にほうやれほ、
雀追ひ追ひ、ほうやれほ。

解 さんざんにこきつかはれて安壽と厨子王はおしまひに山椒太夫のところを逃げ出すのですが、姉は弟を逃がすため川へ身を投げて死に、厨子王はやつとある坊さんから助けられて、それから都にのぼります。後に丹後の國守になつたとき、お母さまをたづねて佐渡ケ島へわたると、お母さまはかうして雀追ひをしてゐらつしやるのです。厨子王はそれをお母さまとは知らなかつたのですが「厨子王こひしや、ほうやれほ。」といふのをきいて、もうたまらなくなつて飛んで行つてかぢりつく。めくらのお母さまも驚いてじつと見つめてゐるうちに不思議に眼があいた。それが厨子王だと知れると思はず抱き合つて二人でおいおい泣いてしまふのです。これが山椒太夫の後のお話。

この童謡は町田嘉章氏も作曲した。

象の子

わたしや象の子、おつとり〳〵してた。

何か知らぬが、ゆつくら〳〵してた。
お眼々ふさいで、うつとり〳〵してた。
お鼻ふりふり、ゆうらり〳〵してた。
何處か知らぬが、のつそり〳〵してた。
いつか知らぬが、とうろり〳〵してた。
何もしもせず、ぼんやり〳〵してた。

坊や
おまんまだよ。

誰か呼ぶけど、うつとり〳〵してた。
お鼻ふりふり、ゆうらり〳〵してた。

お月さま

お月さまいくつ。
十三七つ。
七つの海を、
朝から越えて、
南のはてで、
闇の夜になつて、
ちつちやいペンギン鳥が、
氷の原を、
あつちの星や青いぞ、
こつちの星や赤いぞ。

夜なか

おうちの寝間で
わたしは寝てた。
　あかりが點いて
人ごゑしてた。

見知らぬ部屋に
わたしは寝てる。
　あかりが點いて
人ごゑしてる。

どこだか知らぬ
誰だか知らぬ。
　あかりが點いて
　人ごゑしてる。

ほういほうい

ほういほういと呼んでます。
誰か埠頭に呼んでます。
　ほそい月出る
　眞夜なかに

お目々あいてる
子はないか。

雲のきれめのすぐそこに、
青い四角な燈をつけた
二本マストが泊つてる。

からまつ原

からまつ原の
ちらちら薄日。
かばんをかけた

子供が通る。

泣きたいやうな
さみしい春だ。

どこかで、鳥が
ちつちと鳴いた。

お月夜

トン、
トン、
トン、

あけてください。
どなたです。
わたしや木の葉よ。
　トン、コトリっ

トン、
トン、
トン、

あけてください。
どなたです。
わたしは風です。
　トン、コトリ

トン、

トン、
トン、
あけてください。
どなたです。
月のかげです。
　トン、コトリ。

たんぽぽ

沼の田べりのたんぽぽは、
たんぽぽは、
咲けば、ざぶりと、
波が來る。

たんぽぽ。　たんぽぽ。
波が來る。

沼の田べりのたんぽぽよ。
たんぽぽよ。
咲けば、子どもが、
舟で來る。
　たんぽぽ。　たんぽぽ。
舟で來る。

さいかち蟲

いが栗、ささ栗、栗のいが、
ねんねの弟は何處へ往つた。
　きつち〳〵、さいかち蟲、
　捕りに往つた。

いが栗、ささ栗、栗のいが、
一年待てどもまだ見えぬ。
　きつち〳〵、さいかち蟲、
　飛んで往た。

いが栗、ささ栗、栗のいが、
今年もひわれて墓の上。
　きつち〳〵、さいかち蟲、
　まだゐぬか。

いが栗、ささ栗、栗のいが、
ねんねの弟は土の下。
　きつち〳〵、さいかち蟲、
　捕りに往た。

足踏

足踏してゐる、

僕たちは。

空にはながれる
よい雲が。

海にはさざなみ
ちらちらだ。

學校の外庭
ひとまはり。

まはつて、足踏〳〵
僕たちは。

山茶花咲け咲け、
鐘が鳴る。

新入生

小さな子供さん。
新入生の子供さん。
學校へ行くなら、
連れてつてあげよ。
げんげの原つぱを、
近道しましよ。
小さな制帽さん。

うれしさうな子供さん。
杏の木かげを、
連れてつてあげよ。
雨雨ふるなら、
お傘に入れよ。

小さな鞄さん。
小さなお靴さん。
お友だちになりましよ。
連れてつてあげよ。
子供の燕も、
おさそひしましよ。

酸模の咲くころ

土手のすかんぽ
ジャワ更紗。
晝は螢が
ねんねする。
僕等小學
尋常科。
今朝も通つて

またもどる。
すかんぽ、すかんぽ。
川のふち。

夏が來た、來た。
ドレ、ミ、ファ、ソ。

あの子のお家

あの子のお家はどんな家。
野茨が咲いたと言つてゐた。
仔馬もゐるよと言つてゐた。

あの子のお家はどこいらか。
雲雀よ、空から見ておくれ。
よしきり、よしきり、行て見よよ。

あの子のお家はどのお家。
土手から土手へとのぼつても、
つばなやよもぎの風ばかり。

あの子のお家は葭の中。
向うの向うの沼のへり。
仔馬もゐるよと言つてゐた。

犬のお芝居

ちやつぽん〳〵、ちやつぽんぽん、
ちゝんがちりちり、ちやつぽんぽん、
小犬がひよこ〳〵立つて出た、
緋染の手拭、頬かむり。

ちやつぽん〳〵、ちやつぽんぽん。
ちゝんがちりちり、ちやつぽんぽん。
それ〳〵、お手々で梶よ取つた。
茶縞のおべゝも尻からげ。

ちやつぽん〳〵、ちやつぽんぽん。
ちゝんがちりちり、ちやつぽんぽん。
小熊もぞろ〳〵ついて出た。
へらへらへつたら、へらへらへ。

ちやつぽん〳〵、ちやつぽんぽん。
ちゝんがちりちり、ちやつぽんぽん。
お猿も横から一寸と覗く。
十五夜お月様、幕の上。

ちやつぽん〳〵、ちやつぽんぽん。
ちゝんがちりちり、ちやつぽんぽん。
それ〳〵、いつしよに、へらへらへ、
へらへらへつたら、夜が更けた。

弘田龍太郎作曲

子供の村

子供の村は子どもでつくろ。
　合唱「みんなでつくろ。」
赤屋根、小屋根、ちらちらさせて、
　合唱「みんなで住まうよ。」

子供の村は垣根なぞよそよ。
　合唱「ほんとによそよ。」
草花、野菜、あつちこつち植ゑて、
　合唱「すず風、小風。」

子供の村は子供できめよ。
　合唱「みんなできめよ。」
村長さんを一人、みんなで選び、
　合唱「みんなで代ろ。」

子供の村は早起きばかり。
　合唱「鷄と起きて。」
朝の中、御本。お午から外へ、
　合唱「はたらいて歌はう。」

子供の村は子供で護ろ。
　合唱「みんなで守ろ。」
てんでの仕事、てんでにわけて、
　合唱「みんなで勵まう。」

子供の村は仲よし小よし、
　合唱「喧嘩せずに。」
てんでに助け、てんでに仕へ、
　合唱「樂しんで遊ぼう。」

子供の村はお伽の村よ。
　合唱「お夢の里よ。」
星の夜、話。月の夜、お笛。
　合唱「すやすや眠よよ。」

子供の村はいつでも子供、
　合唱「いつでも春よ。」
子供の祭、おてんとさんの神輿。

こちらでもかつこう、
郭公が啼いて、
雨がはれて、
田舎は涼しい涼しいな。
かつこう、かつこう、かつこう、
私もいそいそ口笛吹いて、
足拍子とつて、
お靴でかつこかつこ、躍りませう。
かつこ、かつこ、かつこ、かつこな、
たらら、らら、らるら。
小母さん、今日は、
小父さん、今日は。

合唱「わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよな。」

八百屋さん

大枇杷、小枇杷、
水蜜桃、葡萄、
苺や野菜、
お籠に入れて、
頭に載せて、
かつこ、かつこ、かつこ、行けば、
薄紫の、
馬鈴薯畑の花盛り。
あちらでもかつこう、

赤い帽子・黒い帽子・青い帽子

こゝは谷川、丸木橋。

赤い帽子をかぶつた子供、
黒い帽子をかぶつた子供、
青い帽子をかぶつた子供。

渡るにやあぶなし戻られず、
みんな前向き一二三、
みんな後向き一二三。

赤い帽子は笑ひ出す、
黒い帽子は泣き出す、
青い帽子は怒り出す。

みんながびく〱一二三。
みんながぶる〱一二三。

お祭

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
祭だ、祭だ。
背中に花笠、

胸には腹掛、
向う鉢卷、そろひの半被で、
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
神輿だ、神輿だ。
神輿のお練だ。
山椒は粒でも、ピリッと辛いぞ、
これでも勇みの山王の氏子だ。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。

眞赤だ、眞赤だ、夕燒小燒だ。
しつかり擔いだ。
明日も天氣だ。
そら、揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
俺らの神輿だ。死んでも離すな。
泣虫やすつ飛べ。差上げて廻した。
揉め、揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
廻すぞ、廻すぞ、
金魚屋も逃げろ、鬼灯屋も逃げろ。
ぶつかつたつて知らぬぞ。
そら退け、退け、退け、
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
子供の祭だ、祭だ、
提灯點けろ、
御神燈献げろ、
十五夜お月様まんまるだ。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
あの聲何處だ、
あの笛何だ。
あつちも祭だ、こつちも祭だ。
そら揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
祭だ、祭だ。
山王の祭だ、子供の祭だ。
お月様紅いぞ、御神燈も紅いぞ。

そら揉め、揉め、揉め、
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。

ほうほう螢

ほうほう螢、篠螢、
晝間は赤い豆頭巾、
日暮はピカピカ、豆袴、
一のお宮で灯を貰ろて、
二の宮田圃へ灯とぼしに、

三の鳥居は藪の中、
四の宮くぐれば貉掘、
貉が啼き出しや、雨がふる、
早よ早よお戻り、夜は凄い、
眞夜中過ぎれば歸られぬ。

ほうほう螢、篠螢、
水神樣はまだ遠い。

鳥の巣

あれ、あれ、なあに。
ありや、鳥の巣よ。

あの巣をとろか。
あの木は高い。
あの山のぼろ。
あの山寒い。
なぜなぜ寒い。
夕焼が寒い。
まだ空赤いに。
それでも、風はさあむいよ。

とほせんぼ

赤い赤い鳳仙花。
白い白い鳳仙花。

その中くぐつて通りやんせ。
赤い花ちるよ。
白い花ちるよ。
いやいや、おまへは通しやせぬ。

仔馬の道ぐさ

道ぐさしずと、
早よ、駈け、仔馬。
かるかや、桔梗、
すすきの原を。

とつとと走れ。
お母さんの馬は、
こちら向いて待つに。
追つつけ、仔馬、
秋風吹くに。
とつとと走れ。

うさうさ兎

てんてん手毬、
おてんてん手毬、
手毬の中に、
何がゐて跳ねる。

てんてん手のなし、
めんめん眼のなし、
みんみん耳のなし、
うさうさ兎の子が跳ねる。

一つ追ひ出そ。
二つ追ひ出そ。
三つ追ひ出そ。
四つ追ひ出そ。
五つ追ひ出そ。

六つ追ひ出そ。
七つ追ひ出そ。
八つ追ひ出そ。
九つ追ひ出そ。

手毬てんてん、雪こんこん、
遠いお山の山奥へ、
十、たうとう追ひ出した。

ちんころ兵隊

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちりちんころ、ちりちりちん、

ちんころ兵隊、喇叭卒、
てとてと、鐵砲も肩にかけ。

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちり、ちんころ、ちりちりちん、

それそれ、いくさに出かけませう、
尖がり帽の緋房も伊達ぢやない。

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちり、ちんころ、ちりちりちん、

いやいや、いくさは、飴ほしい、
お腹がすいては歩まれぬ。

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、

ちりちり、ちんころ、ちりちりちん、
ちんころ兵隊、赤胴衣、
飴屋のお鉦で泣き出した。

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちり、ちんころ、ちりちりちん。

雀の機織り

笹藪、小藪、小藪のなかで、
ちゆうちゆうぱたた、雀の機織り、
彼方でとんとん、
此方でとんとん、

作曲白秋童謡集

やれやれ、いそがし、日がかげる。
ちゆうちゆうぱたぱた、ちゆうぱたり。

雀、雀、雀の子らは、
ちゆうちゆうぱたぱた、雀の機織り、
彼方でとんとん、
此方でとんとん、
やれやれ、いそがし、日がかげる。
ちゆうちゆうぱたぱた、ちゆうぱたり。

雀、雀、雀の子らは、
ちゆうちゆうぱたぱた、その梭ひろひよ。
上へ行つたり、
下へ行つたり、

やれやれ、いそがし、日がつまる。
ちゆうちゆうぱたぱた、ちゆうぱたり。
青縞、茶縞、茶縞のおべゝ、
ちゆうちゆうぱたぱた、何反織れたか、
朝から一反、
晝から一反、
やれやれいそがし、日が暮れる。
ちゆうちゆうぱたぱた、ちゆうぱたり。

とんからこ

舌を切られた子雀は、

子雀は、
泣く泣く、お宿へかへります。
泣いても泣いても口きけず。
ほろほろ涙で、とんからこ。
春着のべゝでも織りましよか。
とんとんからりこ、とんそろり。
とんとんからりと織つたとて、
織つたとて、
切られたお舌は川の中。
とんとんからりこ、とんそろり。
ほろりこ、ほろりこ、とんほろり。

雀のお宿

雀のお宿は山蔭に、
小藪がこんもり、ほそながれ、
下手に丸木の橋ひとつ。

雀のおやどはもう寒い。
誰か來るかと出て見れど、
遠くぢやちりぢり渡り鳥。

雀のおやどはわびしいに、
ときたま機織る梭の音、

野山にとんから響きます。

雀のおやどに日が暮れりや、
ちらちら燈もともるけど、
夜更けは時雨の音ばかり。

兎の電報

えつさつさ、えつさつさ、
ぴよんぴよこ兎が、えつさつさ、
郵便はいだつ、えつさつさ、
唐黍ばたけを、えつさつさ、
向日葵垣根を、えつさつさ、

兩手をふりふり、えつさつさ、
傍目もふらずに、えつさつさ、
「電報。」「電報。」えつさつさ。

雉ぐるま

雉、雉、雉ぐるま、
お雉の背中に積むものは、
子雉、子々雉、孫の雉。

雉、雉、雉ぐるま、
お雉のくるまを曳くものは、
子鳩、子々鳩、孫の鳩。

雉、雉、雉ぐるま、
雉は子の雉、父戀し、
鳩は子の鳩、母戀し。

雉、雉、雉ぐるま、
雉はけんけん、鳩ぽつぽ、
啼いてお山を今朝越えた。

雉ぐるまの玩具は今でも筑後の清水寺の觀世音で賣つてゐます。
この寺は傳教大師の御開基です。京都の清水寺より古いさうです。

ほろろうつ山の雉子の聲きけば
父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ。　行基

蝶々と仔牛

蝶々、蝶々、
ひらひら飛べよ。
仔牛の角に、
さはらぬほどに。
ねんねのゆめを、
覺まさぬほどに。

鳰の浮巣

鳰の浮巣に灯がついた、
灯がついた。
ああれは螢か、星の尾か。
それとも蝮の目の光。
蛙もころころ啼いてゐる、
啼いてゐる。
ねんねんころころ、ねんころよ。
梟もぼうぼう啼き出した。

ぽつぽのお家

ぽつぽのお家は四角なお家。

四角なお家の圓いお窓、
圓い窓から頭を一寸出して。

隣のぽつぽも四角なお家、
四角なお家の圓いお窓、
圓い窓から頭を一寸出して。

ぽつぽう、お早う。
ぽつぽう、お早う。
おお、ぽつぽうよお。

かぜひき雀

草山越えて、野を越えて、
大きなお靴と小さなお帽子。
お家も見えたぞ、うんとこしよ、
大きな爺さんお靴を脱ぐと、
小さな婆さんお帽子を脱ぐと、
いつしよに草臥れ、ぐうぐうぐう。

空は赤い夕燒で、
雀もかへろと、ふたりづれ、
よいもの見つけた、ちゆうちゆうちゆ、
婿さん雀はお靴へこそり、
嫁さん雀はお帽子へこそり、
いつしよに草臥れ、ぐうぐうぐう。

風が吹きます、月が出る、
白いお蕎麦の花の中、
あんまり寒いで目が醒めた。
爺さん、婆さん、ハックショといへば、
お靴の中でも雀がハックショ、
お帽子の中でもハアハアハックッショ。

おやおや大變、風邪ひいた、
お山は雪で眞白だ。
ハックショ、〱、ハアハアハックッショ、
ハックショ、〱、ハアハアハックッショ。

夕燒とんぼ

大きな、赤い蟹が出て、
藺草をチョッキリちよぎります。
藺草の中から火が燃えて、
その火が蜻蛉に燃えついた。
蜻蛉は逃げても逃げきれぬ、
唐黍畑に逃げて來る、
唐黍の頭が紅なつた。
蓼の花に飛んで來る、
蓼の花にも火がついた。
野川の薄に留つた、

薄の穗さきも火になつた。
お庭の鷄頭にやすみませう。
鷄頭もいつぱい火事になる。
助けて下され燒け死ぬる、
蜻蛉は薊草に縋りつく。
蜻蛉の眼玉は圓るござる、
くるくる廻せば山が見え、
山の中から猿が出て
あつち向いちや、赤んべ、
こつち向いちや、赤んべ。

成田爲三作曲

山のあなたを

山のあなたを、
見わたせば、
あの山戀し、
里こひし。

山のあなたの、
青空よ、
どうして入日が、
遠ござる。

山のあなたの、
ふるさとよ、
あの空戀し、
母こひし。

註 弘田龍太郎その他も作曲した

眞夜中

小盲目、盲目、杖ついた盲目、
眞夜中過ぎると、
コツツ〱コツツコツ。

小盲目、盲目、ぞろ〱盲目、
時計の中から、

コツツ〱コツツコツ。

小盲目、盲目、コツツ〱盲目、
一人で寢ますと、
コツツ〱コツツコツ。

小盲目、盲目、怖い〱盲目、
お母さんが居ないと、
コツツ〱コツツコツ。

雪のふる夜

大雪、小雪、

雪のふる晩に、
誰か、ひとり、
白い靴はいて、
白い帽子かぶつて。

大雪、小雪、
雪の降る街を、
誰かひとり、
あつち行つちや、「今晩は。」
こつち行つちや、「今晩は。」

大雪、小雪、
雪のふる中を、
誰か、ひとり、

「泣く子を貰はう。」
「寝ない子を貰はう。」

大雪、小雪、
雪のふる窓に、
誰か、ひとり、
「生膽貰はう。」
「その子を貰はう。」

葉つぱ

杏の葉つぱは杏の香がする。
蜜柑の葉つぱは蜜柑の香がする。

それでも葉っぱは葉っぱっぱ。

煙草の葉っぱも葉っぱっぱ。
山椒の葉っぱも葉っぱっぱ。
それでも、葉っぱは葉っぱっぱ。

いばらの葉っぱにやお針がついてる。
花のない葉っぱは花のよに咲いてる。
それでも、葉っぱは葉っぱっぱ。

緑の葉っぱも葉っぱっぱ。
眞紅な葉っぱも葉っぱっぱ。
それでも、葉っぱは葉っぱっぱ。

雨

雨がふります。雨がふる。
遊びにゆきたし、傘はなし、
紅緒の木履も緒が切れた。

雨がふります。雨がふる。
いやでもお家で遊びませう、
千代紙折りませう、たたみませう。

雨がふります。雨がふる。
けんけん小雉子が今啼いた、

小雉子も寒かろ、寂しかろ。
雨がふります。雨がふる。
お人形寝かせどまだ止まぬ。
お線香花火もみな焚いた。

雨がふります。雨がふる。
晝もふるふる。夜もふる。
雨がふります。雨がふる。

栗鼠・栗鼠・小栗鼠

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、

ちよろ、ちよろ、小栗鼠、
杏の實が赤いぞ、
食べ食べ、小栗鼠。

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、
ちよろ、ちよろ、小栗鼠、
山椒の露が青いぞ、
飲め飲め、小栗鼠。

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、
ちよろ、ちよろ、小栗鼠、
葡萄の花が白いぞ、
揺れ揺れ、小栗鼠。

吹雪の晩

吹雪の晩です、夜ふけです、
どこかで夜鴨が鳴いてます、
燈もチラチラ見えてます。

私は見てます、待つてます、
何だかそはそは待たれます、
内では時計も鳴つてます。

鈴です、鳴ります、きこえます、
あれあれ、橇です、もう來ます、

いえいえ、風です、吹雪です。
それでも見てます、待つてます、
何かが來るよな氣がします、
遠くで夜鴨が啼いてます。

ちんちん千鳥

ちんちん千鳥の啼く夜さは、
啼く夜さは、
硝子戸しめてもまだ寒い。
まだ寒い。

ちんちん千鳥の啼く聲は、
啼く聲は、
燈を消してもまだ消えぬ。
まだ消えぬ。

ちんちん千鳥は親無いか。
親無いか。
夜風に吹かれて川の上。
川の上。

ちんちん千鳥よ、お寢らぬか。
お寢らぬか。
夜明の明星が早や白む。
早や白む。

こんこん小山の

こんこん小山のお月さま、
ついたち二日はまだ小さい。
仔馬の耳より、
まだ小さい。

こんこん仔馬も馬柵の中、
一飛び、二飛び、まだ小さい。
となりの兎より、
まだ小さい。

こんこん小藪の青葡萄、
一つぶ、二つぶ、まだ小さい。
　仔馬の眼々より、
　まだ小さい。

月夜の家

壊れたピアノに、
壊れ椅子、
誰が月夜に彈いてたか。
誰もゐもせず、音ばかり。

白い木槿に、

青硝子、
母様もしかと來て見ても、
中には月のかげばかり。

ときどき光る、
眼が二つ、
黒い女猫の眼の玉か、
それともピアノの金の鋲。

壊れたピアノに、
壊れ椅子、
誰が彈くやら泣くのやら、
部屋には月のかげばかり。

空には七色、
月の暈、
いつまで照るやら、照らぬやら、
壊れたピアノの音ばかり。

お人形燒く家

お人形燒く家、
お竈が一つ、
あれ、あれ、煙が、
海へなびく。

お人形燒く家、

あばら屋だけど、
お庭の鷄頭は、
今が盛り。

お人形燒く家、
お人形だけか、
いえ、いえ、子供が、
籠にひとり。

お人形燒く家、
さびしうないか、
いえ、いえ、ぽつぽも、
來てはあそぶ。

中山晋平作曲

クックコック

クックコック、コッククック、
コケケケ、コッコウ、よう。
春が來た、春が來た。
コケケケ、コッコウ、よう。

粉屋の、粉屋の水ぐるま、
水だまはねはね、早よまはれ。
柳に燕も飛んで來た。
クックコック、コッククック、
コケケケ、コッコウ、よう。

垣根の、垣根の、蕗のたう、
雪どけ、霜どけ、早よ光れ、
畠の芽麥も背のびした、
クックコック、コッククック。
コケケケ、コッコウ、よう。

山越え、山越え、郵便屋、
そらそら、お手紙、早よごらん。
野原にすみれも咲きました。
クックコック、コッククック、
コケケケ、コッコウ、よう。

巣籠の、巣籠の、伏せ卵、

ぴよぴよ鳴き出せ、早ようたへ。
お空に雲雀もごきげんよ。
クックコック、コッククック、
コケケケ、コッコウ、よう。

クックコック、コッククック、
コケケケ、コッコウ、よう。
春が來た、春が來た。
コケケケ、コッコウ、よう。

砂山

海は荒海、

向うは佐渡よ、
　すずめ啼け啼け、もう日はくれた。
　みんな呼べ呼べ、お星さま出たぞ。

暮れりや、砂山、
汐鳴りばかり、
　すずめちりぢり、また風荒れる。
　みんなちりぢり、もう誰も見えぬ。

かへろかへろよ、
茱萸原わけて、
　すずめさよなら、さよなら、あした、
　海よさよなら、さよなら、あした。

月夜のお囃子

夜宮の灯にそゝられて、
月夜の濱に出て見たが、
出て見たが。

濱は松風、浪の音、
はぐれて啼くのは磯千鳥、
磯千鳥。

笛や太鼓のお囃子は、
一岬先やら、何處ぞやら、

何處ぞやら。
戻ればうしろにすぐ近て
たづねりや、やつぱり浪の外、
浪の外。

迷子の迷子の磯千鳥、
月夜の囃子はまだ遠い、
まだ遠い。

たあんき、ぽうんき

たあんき、ぽうんき、たんころりん。
田螺がころころ鳴いてゐる。

たあんき、ぽうんき、たんころりん。
鴉が田螺をつついてる。

たあんき、ぽうんき、たんころりん。
かへるも目ばかり出してゐる。

たあんき、ぽうんき、たんころりん。
ちんちん電車もやつてくる。

たあんき、ぽうんき、たんころりん。
お彼岸まゐりもつづいてる。

註　この作はその後山田耕作によつても作曲された。

みそつちよ

あれあれ、みそつちよが、
チヨチヨンととまつた。
河原の飛び石、
飛び飛びわたつた。

あれあれ、みそつちよが、
チヨチヨンととまつた。
野茨にやとまれず、

葦の根にもぐつた。

あれあれ、みそつちよが、
チヨチヨンと出て來た。
河原の飛び石、
飛び飛びもどつた。

雨ふり

雨、雨、ふれふれ、母さんが、
蛇の目でおむかひ、うれしいな。
ピッチ〳〵、チヤップ〳〵、ラン〳〵〳〵。

かけかけ、かばんを、母さんの、
あとから行こ行こ、鐘が鳴る。
　ピッチ〱、チャップ〱、ラン〱〱。

あらあら、あの子はづぶぬれだ、
柳の根かたで泣いてゐる。
　ピッチ〱、チャップ〱、ラン〱〱。

母さん僕のをかしましよか。
君、君、この傘さしたまへ。
　ピッチ〱、チャップ〱、ラン〱〱。

僕ならいいんだ、母さんの、

大きな蛇の目にはいつてく。
　ピッチ〱、チャップ〱、ラン〱〱。

搖籠のうた

搖籠のうたを、
カナリヤが歌ふ、よ。
　ねんねこ、ねんねこ、
　ねんねこ、よ。

搖籠のうへに、
枇杷の實が搖れる、よ。
　ねんねこ、ねんねこ、

ねんねこ、よ。
搖籠のつなを、
木ねずみが搖する、よ。
ねんねこ、ねんねこ、
ねんねこ、よ。

搖籠のゆめに、
黄ろい月がかかる、よ。
ねんねこ、ねんねこ、
ねんねこ、よ。

七面鳥さん

七面鳥さん、早起きさん、
おかねはとつくになりました。
七面鳥さん、おしやれさん、
一足お先きに、えつさつさ。
七面鳥さん、赤鬼さん、
いばらのそばまで追つて來な。
七面鳥さん、苦蟲さん、

小蜂の蜜でも上げましよか。

七面鳥さん、いばりやさん、
牝牛におじぎをさして來な。

七面鳥さん、うそつきさん、
蛙にお日和聞いて見な。

七面鳥さん、憎まれさん、
夕燒田圃に置きざりさん。

七面鳥さん、宵泣きさん、
お窓の一つ目まつてゐる。

ねんねのお鳩

ねんねん、ほろろん、ねんねんほろよ。
坊やはよい子だ、ねんねしな。
ねんねのお鳩が歌ひませう。
泣かずに、ほろほろ、ほろりこよ。

坊やは乳がなし、母もなし。
雪はふるふる、夜は長し。
ねんねんほろろと啼いたとて、
どうして、お鳩よ、眠らりよか。

みんなして森へ

この豚申す。みんなして森へ。
この豚申す。何しに森へ。
この豚申す。お母さんに逢ひに。
この豚申す。そしてそして、どうするの。
この豚申す。かぢりついてキッスしよ。
　　　　キッスしよ。

註　これは英國の指あそびの童謠を譯したものである

本居長世作曲

雀のお手まり

雀のお手まり、
糸かがり、
青絲、茶の絲、欝金絲。

お寺の茶の花、
石蕗の花、
姉さま、お手まりつきましよか。

雀の妹は、
まだ小さい、

ころげて、お手まり籔の中。

北山おろしが、
寒いなら、
早よ早よお家へおはひりな。

雀の母さま、
とんからり、
窓から見い見い呼んでます。

こもりうた

ねんねや、ねんねや、おねんねや、

坊やのお父さん馬買ひに、
馬は何馬、うさぎ馬、
幌かけぐるまもほしいなら、
明朝曳かしてしんぜましよ。

ねんねや、ねんねや、おねんねや、
坊やのお母さん鳩呼びに、
鳩は何鳩、かはら鳩、
雀のたまごもほしいなら、
明朝さがしてしんぜましよ。

ねんねや、ねんねや、おねんねや、
ねんねや、ねんねや、おねんねや。

町田嘉章作曲

舌切雀

舌切雀はどこへ行た、
どこへ行た、
どれどれ探しに出かけませう。
雀のお宿はあれかいな、
あれかいな、
チョッぽり小藪が山の蔭。
とんとんからりこ、とんからり、
とんからり、

中ではとんから梭の音。

お宿はここかとたづねたら、
たづねたら、
おおおお、お爺さん、ようお出で。

舌切雀のお土産は、
お土産は、
葛籠にいつぱい綾錦。

雀のお宿はどこかいな、
どこかいな、
爺さん私も行て見よか。

慾ばり婆のお葛籠は、
お葛籠は、
開けたらびつくりおオ化。

草川信作曲

月の夜

ぴよつこり〳〵、ぴよつこりしよ。
猫が胡弓彈いた。
女牛がお月樣飛び越えた。
小犬がそれ見て笑ひ出す。
お皿がお匙を追つかけた。
ぴよつこり〳〵、ぴよつこりしよ。

註 これは英米童謠「まざあ・ぐうす」の中から飜譯したものである。

おうた

ねんねんおうた、
　ねんねをねかす。
かりうどのおうた、
　お山を覺ます。

舟唄、海に、
馬子唄野良に。
　お百姓はうたふ、
　田の稲實る。

花屋よ、歌へ、
お花を咲かせ。
　絲とり、たぐり、
　織れ織れ、うたへ。

とってんかんは鍛冶屋、
こつこつ、大工。
　みんなみんな歌へ、
　自分たちの唄を。

子供は歌はう、
子供のうたを。
　みんなみんな子供、
　いつもいつも子供。

離れ小島の

離れ小島の
椰子の木は、
なあぜに寝ないぞ、
お眠らぬぞ。

都の空が
戀しのか、
雪夜の燈を
夢見てか。

離れ小島の
椰子の木は、
紅い月夜に、
ただひとり。

註　別に弘田龍太郎の作曲がある。よくきこえてゐる。

昭和四年十月一日印刷
昭和四年十月三日發行

改造文庫 第二部第六十七篇
作曲白秋童謠集 定價二十錢

著者 北原白秋
發行者 東京市芝區愛宕下町四ノ六 山本三生
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二 杉山愛二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地 改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一二一一番 至一二一四番

(福山製本)

株式會社秀英舍印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犧牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國內を震撼し、日日數千通の感謝狀が舞ひ込んだ、今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無產階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して玆に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その內容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、內容の嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。

□此文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。

□此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜をも考慮に容れて之を示す。

□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす、但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。

□表紙意匠中、1は十錢、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

改造文庫第一部目錄

第一篇 富國論(上卷) アダム・スミス著 (近刊)
第二篇 富國論(中卷) アダム・スミス著 (近刊)
第三篇 富國論(下卷) アダム・スミス著 (近刊)
第四篇 人口論 ロバート・マルサス著 (近刊)
第五篇 經濟學原理 デギト・リカアド著 (近刊)
第六篇 經濟學原理(上卷) スチュアド・ミル著 (近刊)
第七篇 經濟學原理(下卷) スチュアド・ミル著 (近刊)
第八篇 經濟學方法論 カール・メンガー著 (近刊)
第九篇 經濟學原理 チェボンス著 (近刊)
第一〇篇 社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彥譯 1
第一一篇 マルキシズム認識論 ディツゲン著 石川準十郎譯 1
第一二篇 辯證法的唯物觀 ディツゲン著 山川均譯 2
第一三篇 哲學の實果 ディツゲン著 山川均譯 1
第一四篇 神と國家 バクーニン著 本莊可宗譯 1
第一五篇 婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯 6
第一六篇 古代社會(上卷) モルガン著 (近刊)
第一七篇 古代社會(下卷) モルガン著 (近刊)
第一八篇 エミール(上卷) ルーソウ著 內山賢次譯 4

第一九篇　エミール（下卷）　ルーソウ著　内山賢次譯　4
第二〇篇　國家論　オツペンハイマー著　廣島定吉譯　2
第二一篇　金融資本論　猪俣津南雄著　4
第二二篇　日本開化小史　田口卯吉著　2
第二三篇　日本經濟論　田口卯吉著　1
第二四篇　日本經濟學說の要領　經濟的帝國論　瀧本誠一著　2
第二五篇　日本商業史　橫井時冬著　4
第二六篇　日本工業史　橫井時冬著　4
第二七篇　經濟學の實際知識　高橋龜吉著　2
第二八篇　リッケルト論文集　リッケルト著　2

第二九篇　フッサール論文集　フッサール著（近刊）
第三〇篇　女工哀史　細井和喜藏著　4
第三一篇　婦人解放論　スチュアド・ミル著（近刊）
第三二篇　社會進化と婦人の地位　ラッパポート著　山川菊榮譯　2
第三三篇　共產主義小兒病　レーニン著（近刊）
第三四篇　二十世紀初頭の農村問題　レーニン著（近刊）
第三五篇　文學と革命　トロツキイ著（近刊）
第三六篇　幸德秋水集　幸德秋水著　2
第三七篇　中江兆民集　中江兆民著　2
第三八篇　財產起源論　レヴインスキー著　貴島克己譯　1

第三九篇　組織論　レエニン著　鈴木厚譯　3
第四〇篇　三民主義　孫中山著　金井寬三譯　3
第四一篇　唯一者とその所有　マックス・スティルネル著　辻潤譯　6
第四二篇　世事見聞錄　武陽隱士著　本庄榮治郞校訂（近刊）
第四三篇　全譯金融資本論　ヒルファディング著　林要譯（近刊）
第四四篇　近世封建社會の研究　本庄榮治郞著（近刊）
第四五篇　近世農村問題史論　本庄榮治郞著（近刊）
第四六篇　マルクスの歷史、社會並に國家理論（上卷）　ハインリッヒ・クノー著　鳥海森谷濱島共譯（近刊）
第四七篇　マルクスの歷史、社會並に國家理論（下卷）　ハインリッヒ・クノー著　鳥海森谷濱島共譯（近刊）
第四八篇　マルキシズム國家觀　マックス・アドラー著　山本琴譯　5
第四九篇　マルクス主義經濟學　河上肇著（近刊）

（以下續刊）

改造文庫第二部目錄

- 第一篇 古事記 澀潟久孝校訂（近刊）
- 第二篇 萬葉集（上卷） 折口信夫校訂（近刊）
- 第三篇 萬葉集（下卷） 折口信夫校訂（近刊）
- 第四篇 古今集 吉澤義則校註（近刊）
- 第五篇 新古今集 吉澤義則校註（近刊）
- 第六篇 新編源氏物語（上卷） 折口信夫校註（近刊）
- 第七篇 新編源氏物語（下卷） 折口信夫校註（近刊）
- 第八篇 枕草紙 山岸德平校訂（近刊）
- 第九篇 金槐集 幸田露伴校註（近刊）
- 第一〇篇 平家物語（近刊）
- 第一一篇 雨月物語 山口剛校訂（近刊）
- 第一二篇 山家集 齋藤茂吉校註（近刊）
- 第一三篇 俳諧七部集 荻原蘿月校訂 3
- 第一四篇 蕪村七部集 荻原蘿月校訂 2
- 第一五篇 伊勢物語 久松潜一校訂（近刊）
- 第一六篇 神皇正統記 宮地直一校註 3
- 第一七篇 奥の細道、芭蕉翁文集 荻原蘿月校訂 3
- 第一八篇 曾根崎心中、女殺油地獄 黑木勘藏校註（近刊）
- 第一九篇 心中天島宴、冥途飛脚 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二〇篇 國姓爺合戰 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二一篇 槍權三重帷子、夕霧阿波鳴門 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二二篇 心中重井筒、丹波與作 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二三篇 山崎與次兵衞壽門松、心中宵庚申 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二四篇 傾城反魂香 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二五篇 淀鯉出世瀧德、長町女腹切 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二六篇 堀川波鼓、博多小女郎波枕 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二七篇 五十年忌歌念佛、大經師昔曆 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二八篇 菅原傳受手習鑑、假名手本忠臣藏 黑木勘藏校註（近刊）
- 第二九篇 八百屋お七歌祭文、お染久松袂の白絞り 黑木勘藏校註（近刊）
- 第三〇篇 伊賀越道中双六、一谷嫩軍記 黑木勘藏校註（近刊）
- 第三一篇 大鏡 吉澤義則校註（近刊）
- 第三二篇 徒然草 吉澤義則校註（近刊）
- 第三三篇 日蓮上人集（近刊）
- 第三四篇 親鸞上人集（近刊）
- 第三五篇 北村透谷選集 島崎藤村編 1
- 第三六篇 樋口一葉選集 樋口一葉著 1
- 第三七篇 平凡 二葉亭主人著 1
- 第三八篇 子規俳話 正岡子規著 3

第三九篇		子規歌話	正岡子規著	(近刊)
第四〇篇		坊つちやん	夏目漱石著	2
第四一篇		草枕	夏目漱石著	2
第四二篇		それから	夏目漱石著	3
第四三篇		一握の砂 悲しき玩具	石川啄木著	2
第四四篇		我等の一團と彼 雲は天才である	石川啄木著	1
第四五篇		山陰土產その他	島崎藤村著	2
第四六篇		作曲白秋民謡集	北原白秋著	2
第四七篇		獄中記	オスカア・ワイルド著 神近市子譯	2
第四八篇		厭世家の誕生日	佐藤春夫著	1
第四九篇		日輪	横光利一著	1
第五〇篇		勞働者の居ない船	葉山嘉樹著	1
第五一篇		海に生くる人々	葉山嘉樹著	2
第五二篇		小公子	バアネット著 若松賤子譯	2
第五三篇		ホワイト・ファング	堺利彦譯	3
第五四篇		はやり唄	小杉天外著	(近刊)
第五五篇	自選歌集	朝の螢	齋藤茂吉著	2
第五六篇	自選歌集	十年	島木赤彦著	(近刊)
第五七篇	自選歌集	川のほとり	古泉千樫著	2
第五八篇	自選歌集	松の芽	中村憲吉著	2
第五九篇	自選歌集	海やまのあひだ	釋迢空著	4
第六〇篇	自選歌集	立春	木下利玄著	2
第六一篇	自選歌集	花樫	北原白秋著	(近刊)
第六二篇	自選歌集	人間往來	與謝野晶子著	2
第六三篇	自選歌集	槻の木	窪田空穂著	2
第六四篇	自選歌集	野原の郭公	若山牧水著	2
第六五篇	自選歌集	原生林	前田夕暮著	3
第六六篇	自選歌集	空を仰ぐ	土岐善麿著	2
第六七篇	作曲白秋	童謡集	北原白秋著	2
第六八篇	作曲白秋	國民歌謡集	北原白秋著	2
第六九篇	作曲白秋	舞踊曲集	北原白秋著	2
第七〇篇		背徳者	アンドレ・ジッド著 石川淳譯	2
第七一篇		チェホフ書簡集	内山賢次譯	5
第七六篇		愚庵歌集	齋藤茂吉編	(近刊)
第七七篇		芭蕉遺語集	荻原井泉水校訂	(近刊)
第七八篇		七番日記(上巻)	荻原井泉水校訂	(近刊)
第七九篇		七番日記(下巻)	荻原井泉水校訂	(近刊)
第八〇篇		おらが春	荻原井泉水校訂	(近刊)
第八二篇		新花つみ(蕪村日記)	荻原井泉水編	(近刊)
第八八篇		寡婦マルタ	エリイザ・オルゼシユコ著 清見陸郎譯	3

第八九篇　虚子句集　高濱虚子著（近刊）
第九〇篇　井泉水句集　荻原井泉水著　5

（以下續刊）

子規全集豫約募集

子規の藝術の如く眞に
血を以て書かれ全人格
を傾倒して綴られた大
文學は何處に在る乎

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り、子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の園圃より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして强力なるもの。子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて淸節高風、されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虛飾なく些の技巧なく、赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。「子規全集」十八巻は、日本文學中不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の燃烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持を俟つ。（内容次頁に在り）

『子規全集』豫約規定

□內容　全十八巻、總頁約八千頁。前版に漏れたる未發表の作品をも悉く收容す。

□體裁　本文四六判九ポイント組、一册紙數平均約四百頁乃至五百七十頁口繪は子規居士の寫眞、短册、原稿、書簡、草畫等、見返しは居士寫生畫中の逸品「靑梅」「櫻ゝ實」色刷、裝幀淸麗無比

□頒布方法　豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込み下さい。

□刊行期日　昭和四年七月第一回を刊行し爾後每月一册づゝを刊行し昭和五年十二月を以て完結す。

□申込方法　先づ御申込みの際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最後の月の會費にあてるのでありますから、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戾し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

□會費　（一）每月拂一册に付、壹圓。（二）一時拂全（十八巻）十七圓。

□送本料　會費の外に。送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尙書留送付を希望せらるゝ向は別に書留料十錢を御增し下さい。

□拂込方法　振替貯金又は郵便爲替でその月の一日迄に着金するよう御拂込み下さい。

子規全集總內容

日本文學の金字塔

第一卷 俳句全集（第一卷）
第二卷 俳句全集（第二卷）
第三卷 俳句全集（第三卷）
第四卷 俳論及俳話（上卷）
第五卷 俳論及俳話（下卷）
第六卷 歌論歌話及評論
第七卷 和歌、新體詩、漢詩
第八卷 小說、紀行、小品
第九卷 少年時代創作篇（上卷）

萬代不朽の名著

第十卷 少年時代創作篇（下卷）
第十一卷 隨筆（上卷）
第十二卷 隨筆（下卷）
第十三卷 編著（上卷）
第十四卷 編著（下卷）
第十五卷 書簡（上卷）
第十六卷 書簡（中卷）
第十七卷 書簡（下卷）
第十八卷 未發表作品及年譜、藏書目錄

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二